ISSN 1345-3580

Glocal Tenri

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.22 No.7 July 2021

7

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- 巻頭言
  海外布教の中でぢばを考える①
  ／永尾　教昭 …… 1
- 「おさしづ」語句の探求（47）
  「おさしづ」第７巻における教会事情と「道」
  ／澤井　治郎 …… 2
- 台湾の社会と文化―天理教伝道史と災害民族誌（２）
  台湾社会の多様性と複雑性
  ／山西　弘朗 …… 3
- ライシテと天理教のフランス布教（25）
  ワクチン接種が進むフランスの現況
  ／藤原　理人 …… 4
- 日本語教育と海外伝道（36）
  日本語教育と異文化伝道①
  ／大内　泰夫 …… 5
- 宗教伝統における聖典の意味構造（７）
  「語られる聖典」としての儒学テクスト
  ／澤井　義次 …… 6
- イスラームから見た世界（13）
  イスラームの聖地巡礼―コロナ禍のマッカ―
  ／澤井　真 …… 7
- 遺跡からのメッセージ（71）
  大和の文化遺産を学ぶ⑨－天理参考館の収蔵資料を活用した唐古・鍵遺跡の再評価
  ／桑原　久男 …… 8
- コンゴ社会から見るアフリカ・ヨーロッパ関係試論（38）
  ドゥニ・サス＝ンゲソ大統領①
  ／森　洋明 …… 9
- 現代宗教と女性（32）
  ケア・フェミニズムの提唱
  ／金子　珠理 …… 10
- 図書紹介（123）
  澤井真著『イスラームのアダム』
  ／堀内　みどり …… 11
- おやさと研究所ニュース …… 12
  第339回研究報告会／マイグレーション研究会で研究発表

巻頭言

海外布教の中でぢばを考える①

おやさと研究所長　永尾教昭　*Noriaki Nagao*

天理教の教理の中で最も重要と言ってもよいものが、「ぢば」への信仰であろう。当然海外の地で布教を進める中でも、ぢばの存在を教え、その意味を説いていかねばならない。ただそこには、海外ならではの難しさもある。しばらく号を跨いで、そのことについて考えてみたい。

ぢばとは、天理教教会本部神殿の中央に位置し、「かんろだい」と呼ばれる木製の柱状の台が据えられている地点を指す。天理教の最重要祭儀であるかぐらづとめは、このぢばを囲んで勤められ、それ以外の場所で勤められることはない。

教理では、ぢばは親神が人間を創造された元の地点である。ここから、ぢばに参拝することを、いわば人間がそのふるさとに帰ることに譬えて「おぢば帰り」と称する。同時に、ぢばは天理王命の神名を授けられたところである。それゆえ、信者の礼拝の目標であり、救済の源泉の地点でもある。教祖は、「月日のやしろ」であり、立教以降のその言動はすなわち親神のそれである。つまり、「地上における“月日の社”と“元なるぢば”とは、（略）云わば地上における天理王命の“動”と“静”との姿」[(1)]である。

もともと教祖がこの「ぢば」という言葉を用いた際、特殊な意味の言葉として使ったのではなく、地場産業などという場合と同様、普通名詞として使用している。これに「この世の元の」あるいは「神のやかたの」などといった修飾語を付けてその意味を明らかにしていった。それがやがて、「おさしづ」で、例えば「ぢばがありて、世界治まる」（M21.7.2）などのように、「ぢば」と独立して使われ、やがてこの言葉が単独で特別な意味を持つようになる。現在、信者の間でも「ぢば」と言えば、天理教の固有の教語として使われている。

世界中に聖地と言われる場所は多くある。ユダヤ教におけるエルサレムやカトリックにおけるルルド、イスラム教におけるメッカ（マッカ）、日本の真言宗における高野山などもそれに数えられるだろう。

ただ、天理教におけるぢばの意味は、それら一般的な聖地とやや趣を異にする。ぢばが人類が宿しこまれた場所といった教理上の意味もさることながら、天理教教団の行政上のぢばの意味（無論、それも教理からそうなったのであるが）が、他の宗教における聖地のそれと違うと思われるからである。

ぢばは、上に述べたように厳密には天理王命の神名を授けられた場所であり、人間創造の場所一点を指すが、広義においては様々な意味がある。信者の日常の信仰生活の中で、しばしばその広義の使い方がなされる。

まず天理教教会本部を言う。この本部という言葉も２つの意味があり、「本部に参拝する」というように①神殿を指す。「おさしづ」には「鏡屋敷ぢば」（M24.5.13）とあり、神殿とぢばが同義となっている例がある。また、②教団の中枢部、ヘッドクォーターを本部と言い、この意味でぢばと表現される場合が多い。例えば本部の勤務者として働くとき「おぢばで勤める」などと言う。また教団の方針などを「ぢばの声」などと表現する。

さらに③大きく神殿の周辺を含む一帯などを指して、そう呼ぶ場合がある。例えば、天理高校や天理大学を「おぢばの学校」と表現したり、本部周辺の天理市内に住むことを「おぢばに住む」とも表現する。この場合「親里」と同義である。

このうち、②教団のヘッドクォーターを「ぢば」と表現することは、慣習でそうなったと言うよりも、教理上必然性がある。天理教では聖地であるぢばと教会本部が不離一体でなければならない。これは天理教信仰の特徴の一つであろう。

［註］（１）中山正善著『続ひとことはなし その２』（天理教道友社、1957年）